

去る 25 日夜、同居中の義母が薬石効なく終に逝ってしまった。享年 85 歳であった。本年 1 月中旬に突発性多発性胃潰瘍にて吐血・下血して救急病院に搬送、一旦退院はしたものの、体調は勝れず、悪性リンパ腫も発見され国立病院に入院、家族としても爾後の療法等について覚悟を決めざるを得なかった。それでも、再度の入院から退院した後は、週に二回ほど喜んで通っており、生命力に驚いたのであったが、もともと重い心臓手術もしておりリンパ腫の影響もあったのか、デイ・ケアに通う体力もなくなり、自宅で療養することとなった。家内の献身的な看病と掛かりつけの病院とその病院に併設されている訪問看護ステーション並びに介護認定を受けた時以来、親身に世話して頂いているケア・マネージャーさん等の見事なまでの緊密な連携により、母が持つ寿命を全うしたと考える。この間並びに葬儀一切が終了した時点での所懐の一端を記したい。

1 在宅でのターミナルケアを可能とする体制

義母の場合には、先に述べたように、掛かりつけの病院の医師と、当該病院に併設されている訪問看護ステーション（看護師の隔日の訪問と緩和医療を専門とする医師による毎週の訪問診療の体制、随時の電話相談等）とケア・マネさんが本当に一体となって、しっかりと情報も共有し的確な指示をして頂いたので、母の療養を一手に引き受けてくれる家内も安心して介護・看護が出来たものと思う。ケア・マネさんからこのような制度があるというのを、教えて頂けなかったら、満足な介護・看病も何も出来はしなかったろう。本当に感謝である。

2 家族に対するバックアップ

病人が痛みを訴えたり、或いは譫妄（せんもう）行動と言う回りの者には理解し難い特異行動を行う時の対応や、或いは四六時中目を離せないような状況など、素人ではどうすれば良いのか全く解らない時でも、電話すればどのように対応した方が良いでしょうと言うアドバイスを随時受けられる。

隔日訪問して貰える看護師や週一回の医師の訪問診療の際には、経験豊富な彼等から家族へのアドバイスがあり、非常に心強い。

このような介護者・看護者に対するバックアップがなければ、在宅ケアは言うは易く、行うは難しであろう。愛情があれば如何なる困難をも乗り越えられる等と言うのは夢想である。現実筆舌に尽くせぬほど厳しいものであろう。

3 在宅での緩和医療:あるべき死か！

母の生前の希望もあり、家族の了承もあり、入院して治療や延命のみを目的とした色々な管を体中に張り巡らされた状況は家族としては見るに絶えないものである。その点、在宅により、モルヒネ等の投与やその他の緩和医療により、家族との心の交流をも維持しつつ、家族としても命の許す限りの面倒を見ることが出来る。

家族にとっては、死という厳粛なものを自然に受け入れていく助走期間でもあるようだ。看護師により洗髪も体の清浄をも、時には下の世話までもして頂きながら、人間としての尊厳を一応保ちつつ、畳の上で旅立てると言うのは、不謹慎ではあるが、ある意味幸せなのかもしれない。

4 女性は遅しく、男はだらしない

それほど長い介護・療養看護の間ではなかったが、それでもこの間己が如何に意気

地なしなのかを痛感させられた。いざとなると何も出来ないのだから始末が悪い。家内や娘がいるとつい任せっきりにしてしまう。その点、女性は娘や孫だからというだけではない、何か言うか、いざと言う場合には如何なることをも辞さずに黙々と敢然として行うのだから強い。訪問看護する看護師も大したものである。

5 次代に繋ぐべきもの

母の死に際して、中学生になったばかりや小学生の多感な孫娘達は何を感じたのであろうか。病になり入院し、退院し、緩和医療の状況を解らないながらも具に見て家族愛や人間の死というものを感じてくれたのであろう。

また、2歳になったばかりの嫡孫は、「おばあちゃん寝てるね」とお棺に横たわる母を見て無邪気に言う。それがまた参会者の涙を誘う。3年前の父に引き続き今回も自宅において近親者のみの所謂家族葬として通夜から告別式を執り行った。九州から数年前に上京してそれほど知人等も多くないことから、近親者のみの心の籠もった葬儀が出来た。このような事を通じ子供や孫達に何かしら伝えることが出来たものと思料する。

6 訪問看護システムの周知を！

今回、母の件がなく、ケア・マネさんが居なかったら、述べたような介護・療養は知ることなかったろうし、母にしろ家族にしろ、悲しいながらもある意味満足のいく見送りは出来なかったと確信する。まだまだこのような訪問看護システムが知られていないことは残念である。周知努力が望まれよう。